

あとがき

開発経済学の歴史を『開発経済学のアイデンティティ』（野上 [2004a]）に書いたとき、今度は開発経済学の未来を考えてみたい、と思っていた。とくに「人間開発」という概念が開発論にどのような未来を与えるかをみてみたかった。本書で『人間開発報告書』について、いままで漠然と考えてきたことをまとめることができたことは本当にうれしかった。不十分な部分もあるのは承知しているが、時間の制約や筆者の精神力の限界もあり、ともかく一度まとめることにした。書き上げてみると、やるだけやったという気持ち、そして長年負っていた責務の一部を終わらせたという気持ちが出た。

『人間開発報告書』に対する筆者の関心は、指標に関するものと思に關するものがある。指標に関する関心はアジア経済研究所に入った時にさかのぼる。当時はアジア諸国の景気動向を予測する指標を作成するプロジェクトに参加した。過去の歴史的データを使って、景気拡大がどのくらい浸透しているのかを分析する景気動向指数を作成していた。この指標の英文名称がhistorical diffusion index、略称HDIであった（長田博・平塚大祐編『アジアの成長循環』アジア経済研究所、1992年、pp.217-234）。いままでずっと「HDI」に関わってきたことになる。自分の社会経済に関する見解を指標に要約し、断片的事実をクロノロジーにまとめて歴史的な脈を明らかにする、という方法はこの頃に身に付けた。

本書は『人間開発報告書』を中心にした思想史研究であるが、『人間開発報告書』の思想を通じてセン、ハーシュマン、マルクス、アダム・スミスといったさまざまな思想家の書物もおもしろく読めるようになった。思想史とはひとつの思想を学んで、思想を吟味する態度と方法を養う作業なのだと感じた。

本書の作成の過程ではさまざまな方々から有益なご助言をいただいた。

とくに広島大学大学院国際協力研究科・松岡俊二先生、金子慎治先生には本書に結びつくような建設的なご助言を最初にいただいたことに対して、心から御礼申し上げたい。また本書の草稿は以下の学会大会で報告された。

(1)国際開発学会2004年全国大会(2004年11月27、28日、国際協力機構国際協力総合研修所、座長・弓削昭子先生、討論者・牧野耕司先生、青山和佳先生)「知的公共財としての人間開発指標」(野上[2004c])

(2)進化経済会2005年大会(2005年3月26、27日、東京工業大学すずかけ台キャンパス、国民経済計算セッション 組織者・作間逸雄先生、司会・有吉範敏先生、討論者・出口弘先生)「研究プログラムとしての人間開発指標」(野上[2005a])

(3)環境経済・政策学会2005年大会(2005年10月9日、早稲田大学早稲田キャンパス、座長・寺西俊一先生、討論者・松岡俊二先生、陳禮俊先生)「環境研究に対する人間開発指数の貢献」(野上[2005b])

紙幅の制約もあり、1人ひとりお名前を記すことは控えさせていただくが、以上の学会では、それぞれの座長(司会)、討論者、参加者の皆様から有益なコメントをいただいたことに対して心から御礼申し上げたい。

これらの報告をもとにして2006年3月末に一度原稿をまとめたが、査読者のコメントをいただき、全面的に書き直した。このなかで第3章は2006年9月12日「アイデアス実践講座 開発経済学入門 福祉の開発経済学」(JICA地球広場)、10月12日関西学院大学COE研究会「人間開発指数とその周辺」(司会・高阪健次先生、組織者・亀井伸孝氏)として報告された。そこでの座長、討論者、参加者から有益なコメントをいただいたことに対しても、心から御礼申し上げたい。

上記のほかにも勤務先である日本貿易振興機構アジア経済研究所の方々からは多大なご支援、ご協力をいただいた。研究編集室には本書の企画・編集でお世話になった。本書の草稿を読んでもらった2名の査読者の方々からは内容全般にわたって貴重なコメントをいただいた。本書の草稿はアジア経済研究所開発スクール(IDEAS)第16期日本人研修生向け授業「人間開発論」でも報告されたが、その参加者のみなさんからも有益なコメントをいただいた。印刷・製本に関わった方々は本書を美しい書物に仕上

あとがき

げてくださった。もちろん，本稿は筆者一人の責任によるものであり，まだ不十分な点もあると思う。本稿の誤りなど，ご指摘くだされば幸いである。最後に，本書の成立，そして，これまでの筆者の仕事や生活においてお世話になったすべての方々にお礼申し上げたい。

2007年 1 月

著 者